

沖

俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

土手双翼

能村 研三

五百号大会を終えて

五月二十七日、二十八日の両日「沖」の五百号記念大会が浅草ビューホテルで行われた。開業したばかりの東京スカイツリーが近くにあることから浅草はいつもよりは賑わいをみせていた。幸い、天気にも恵まれ全国から多くの会員、同人が参加いただき、内輪の会ながらも、五百号までの先師、先輩が築かれた「沖」の足跡を振り返りつつ、五百一号から新たにスタートする我々「沖」の決意を改めて確認することが出来た。

神輿庫の結界めきし網干紋
麦熟るる月夜新藤兼人逝く
祭笛舫綱放る勢ひかな

ちょうど同じ二十日には金子兜太先生が主宰される「海程」が創刊五十周年を迎えられ祝賀会が東京で

畦止めの竹の真青や菖蒲咲く

薫風や土手双翼に小駅あり

抽ん出て絞り尽くしの菖蒲花被

菖蒲田を置く東京の端の端

オルガンの手許明かりや梅雨深し

太陽に星重ね合ひ蟻の列

開催された。私もお招きの通知をいただいたが、日が重なってしまつたので欠席となつた。

金予兜太先生と先師登四郎は戦後作家として同じグループで俳壇で活躍した。昭和三十一年に第五回現代俳句協会賞を同時受賞したことも二人の縁の深さを感じるが、同じ日に「海程」は五十周年、「沖」は五百号と「五」の数字の縁を感じた。当時兜太は「前衛派」として、登四郎は「伝統派」として、共に現在の俳壇の礎を築いた一員であることは間違いない。

「沖」も本号はすでに五百二号であるが、次の目標に向けて、会員、同人の皆さんと共に新しい俳句作りを目指して精進していきたい。

能村 研三



蒼茫集



石の椅子

安居正浩

ダンディーと言へば燕の方が上
子のシャツも一緒になびく鯉幟
本堂の闇へ誘ふ著莪の花
石の椅子木の椅子どこも桜薬
本棚の要塞めきぬ春愁ひ
木洩れ日の軽さを運ぶ花笈

たかなな

森岡正作

逝く春を沖の巨船に託しけり
海底に都市あるごとく霞みをり
たかななの暴発しさうな抱へやう
園児みな翼を持てり薄暑光
行く他はなし麦秋の深轍
向こう傷一つや二つ青嵐

水平線

細川洋子

理发店パリスの鏡面光り夏きざす
夏服や水平線を見たくなる
中腰のやがて本腰潮干狩
病院の番号待ちといふ薄暑
梔子の草臥れ錆と申すべし
バスタブに岩塩入れし麦の秋

夏を呼ぶ

宮内とし子

薄暑光コンビナートのタンク群
夏を呼ぶ工業地帯メタリック
未来図は埋立ての地に蟻走る
コロッケの大判小判子供の日
この谷戸の鎮もりも佳し花は葉に
葉桜の径の翳りに身を添はす

玲 瓏 大畑善昭

石川啄木没百年

あめつちの五月玲瓏
花筏はた花畳隙もなし
踏青のこれや大きなもぐら穴
浦島草野には一朵の雲もなく
蝶低く飛びすぐそこに巨き山
野遊びの先達若いねと言はれ

高速艇 上谷昌憲

春荒れの雲の底ひを高速艇
水飲める猫の舌打ち春の闇
うかれ猫追信堰を切りにけり
蜘蛛の囿に昨夜の落花の五六片
外濠を二駅歩く夕ざくら
天日干しさながら川の鯉幟

托 卵 北川英子

灯ともるに間ある暮色や春惜しむ
茅花流しもう少年でなき匂ひ

托卵のあとかせつせつ時鳥
虹消えてやつぱり元の齡なり
晩節てふやさしい時間花ゆすら
滴りや山の涙腺枯るるなし

木遣歌 吉田陽代

印内八坂神社改築二句

今日の空ふかぶかと抱き春櫂
木遣歌そろひ高まる新樹光
舟繋ぐにも似て緑蔭に身を入れぬ
余花に逢ひしことも幸せ墓詣づ
桜朶しきりに降りぬ下校どき
ざわめきて葛原呼応雷起る

無一物 千田百里

信号に堰かれてよりの花疲れ
明易し虚実皮膜の間にゐて
無一物とはまこと五月の羊たち
青葉籠りや鳥語訳してみたりして
暁の雷三社さまへの祝砲か
変りゆく歌舞伎座・銀座朴花忌

すこしむかし 辻美奈子

くちなはのちぢむともあとしざるとも
けふよりは早苗田となる水の揺れ
えご咲いてこんなところに蒙古斑
揚雲雀あらがふもののある如一
一八やすこしむかしをすぐ忘れ
緑雨かな眼科の椅子にゐて眠し

三面鏡 菅谷たけし

フオークダンスのやうに組替へ花筏
おぼろの夜身に抱くランゲルハンス島
春愁や三面鏡に顔三つ
矢通りのやうな裏道つばめ来る
燕来る紙飛行機をよくとんで
田水張り村の灯りの倍増す

持ち時間 樋口英子

控へ目に生きて桜の待たれをり
花万朶ひらく幽かを聴きもらす

枇杷剥いてはつと己れの持ち時間
試着室白パンプスの揃へあり
豆ごはん昔は祖父の恐かりし
白地着て勝気性らし身のこなし

山 藤 高橋あさの

陽をこぼす樹々のさゆらぎ愛鳥日
水音が田をつなぎゆく五月かな
更衣余生と言ふも軽からず
山藤の人寄せつけぬ遠さかな
夏鶯歩み遅れし人を待ち
麦秋やうかと帽子を飛ばされし

夏 鶯 酒本八重

青垣を背に師の碑深^よ吉野^し美し
聖鐘に夏鶯の声の和す
糸遊や人形塚へ招かるる
土不踏しめやかとなる花名残
ふろしきのやうな母なり日永なり
年寄りはどこにでもゐて九輪草

花天井 藤原照子

心眼に大和三山夕おぼろ
皇子の名の部屋万葉の春の月
灯の入りて花天井の段葛
背景に五山の芽吹き「静の舞」
おぼろ夜の震度5髪のぬれしまま
葉ざくらとなり露座仏のやすらげり

真空の色 吉田政江

真空の色は灰色霞来るか
突風やどんと牡丹の総崩れ
五月雛多髯の乱れも今流に
あとで知る主治医の異動かぎろへり
更衣記憶の綾を手繰りをり
スーパ一の隅に六日の菖蒲かな

風のきらめく 田所節子

奔り来て水山葵田に静もれり
囀の国に入りゆく登り坂

山毛櫟林に風のきらめく五月くる
木々芽吹き山は光の点描画
ぼうたんの薬に日ざしを溜めてをり
花吹雪こたびも拍手する側に
電球交換日 久染康子

花大根中洲占領してゐたり
夏に入る水音隈なく勢ひ立ち
築作り杭打つ度に水濁る
羽搏きの千切れんばかり巢立鳥
母の日や子等来て電球交換日
母の日の主役途中で子に譲る
ベンジンは 成宮紀代子

潮入りや屋根に炭干す花見舟
ペディキュアの素足伸びをり齒科の椅子
五重塔仰ぎて鳴らすラムネ玉
ベンジンは母の香りや単衣着て
白味噌の餡望郷の柏餅
制服の押し寄せて来る駅薄暑

潮鳴集

ベビー靴

栗原 公子

本気とは他見えぬこと潮干狩
抗へぬことのあるこれ花は葉に
かぎろひの野に歩みそむベビー靴
行く春や留守番電話に声のこし
銀河系のかたすみに浴ぶ花吹雪

春の地球

林 昭 太郎

霾やラジオの拾ふ広東語
草に寝て春の地球を抱くかな
五月来る樹上に白き花掲げ
緑さす帽子ケースに金のロゴ
ゴーヤ植ゑ夏百日の始まりぬ

神の領域

内山 花葉

神の領域越えし原子炉海市立つ
春愁のまぬがれがたく老いてをり
縄文土器にのこる煤あと百千鳥
花蘇鉄ジュラ紀の記憶もて太る
雷さまの激語耀歌の山響動もす

フィナーレ

篠藤 千佳子

モニターにモノクロの春惜しみけり
フィナーレの歌劇のごとく海市立つ
ひと匙の上白糖や春惜しむ
ゼロ並ぶスコアボードや夏来る
嫁といふ立ち位置にゐて額の花



沖作品



能村研三選

ゆくさきに幸せあり亡花あかり
「せくらせくら」若かりし母の歌唄ふ
文様の上方ぶりや花ごろも
夢に散りうつつに散りて花ゆふべ
終章となりて一氣に花ふぶき
柳絮飛ぶゆつくり動く象の耳
菜花咲き灯台木綿日和かな
春陰にぬくき札吐く支払機
紋白蝶まだ鍬音に気づかざり
我にまだ氣迫の血潮接木せり
泰然と騎士像きらり松の花
登り来て神水汲めり余花残花
ぼうたんに惑はず白さありにけり
穢れなき空の安らぎ朴の花
溪流の闇を震はず河鹿笛

岐阜

花田 心作

茨城

岡澤 田鶴

栃木

五十畑悦雄

春休み餓鬼大将の交替期
筆圧の強きたよりよ青あらし
早乙女の婆さみどりの補植かな
白詰草遠き記憶にうさぎ飼ふ
塔しのぐものなき空に初夏の風
田水張りいま夕月を迎へけり
葉桜の木洩れ日浴びる気功かな
初蝶の辺りの空気華やげり
耳鳴りはしだいに春の波の音
波の秀の一つひとつに薄暑光
子供の地球の丸く見ゆる丘
能筆の賞状うれし五月晴
上書きは父の筆跡紙魚はしる
和紙に似し音たてて着る宿浴衣
決断を促す夏の嵐かな

千葉

浅野 吉弘

岩手

高橋 和枝

市川市

須山 登

沖作品 15句選評

*
能村研三

終章となりて一氣に花ふぶき 花田 心作

咲くまでが楽しみの桜だが、咲いてしまうと花吹雪とともに一氣に覚めてしまうのも桜。日本の古典文学では「桜は花びらの散る時が一番美しい」と言われてきた。古今集によみびと知らずの歌で「残りなくちるぞめでたき 桜花 有りて世の中はての憂ければ」という歌がある。口語訳をすると「散り始めたから全部散ってしまうのが愛でたいよ。桜の花よ。いつまでも残っている」と、世の中の終りというものは醜いものだから「桜の命は短い。桜が満開になると、決まっているかのように風の強い雨が降る。そして満開の桜が枝から無残にも切り離され、春の嵐の中に飛ばされていく。その潔さは桜の命である。

「終章となりて」という措辞からも、人の命はいくら長くなつても、永遠の時間から見れば、個々の人間の生の時間は、束の間のあつという間の時間である。いわば桜の花の命と同じで

あることを暗示させている。

菜花 咲き 灯台 木綿 日和 かな 岡澤 田鶴

岡澤さんは、茨城県だが千葉県の銚子に近い所に住まわれている方なので、この灯台は銚子の灯台であろう。銚子の犬吠崎灯台は海に突き出ているので、ここでは真つ青な海の色も想像できる。真つ白な灯台、真つ青な海の色、そして菜の花の黄色がうまく一句の中で配合されている。こんな色合いから来る幸福感はまさに「木綿日和」という一語に尽くされるかも知れない。

ぼうたんに惑はず白さありにけり 五十畑悦雄

「白牡丹」と言えば虚子の「白牡丹といふといへども紅ほのか」という句が有名だが、牡丹園で豪華に咲き誇る牡丹を見ていると「花言葉」にもある「富貴」「壮麗」という言葉がよく似合う。しかし、「白牡丹」はこの印象に加えて清潔、気品さも加わる。これからも「惑はず白さ」という表現が頷ける。

筆庄の強きたよりよ青あらし 浅野 吉弘

筆庄が強い人は、まじめで意思は強く神経質な場合が多くて筆庄の弱い人は、明るく社交的で意思が弱く感情的な人が多いとどこかで聞いたことがある。筆庄の強いたよりを貰うと、差出人の強い意志も垣間見ることが出来る。「青あらし」という季語からも、本人と相手方の信頼関係の中で交された確かな文面が蘇ってくる。(以下略)